



(四ツ谷見付橋横灯)

### 名誉員 大蔵公望

自分は大学で確かに土木工学科の学生として土木技術を学んだに相違ないが、卒業後ただちに渡米し、在米中の4年間鉄道会社で測量や設計の実地を経験したものの明治41年帰国すると同時に技術より、運輸の方面に興味を覚え、時の鉄道院副総裁平井晴二郎博士にお願いして東海道線の静岡駅に助役として採用され、以来50余年間鉄道の運輸業務一筋に精進してきたので、はなはだ残念ながら、いまの若い技術者に教える何物をも持たないことを了承していただきたい。新しい若い技術者だけでなく広く日本の青年に訴えたいことがあるので、それを聞いていただきたい。

つぎにかかげる詩は、自分が昨年東南アジアに出かけようとした際に公表するつもりで書いたもので、自



大蔵名誉員

分のいま持っている感想と希望のすべてが、この中にふくまれている。

### アジア・アフリカ

#### 大蔵公望作

わが愛する日本の青年諸君に告ぐ  
われ わが愛する日本の土に生を享けて満80年  
たとえ八十路の坂を超ゆるとも  
われ青春の意気未だ衰えず  
アジア・アフリカ民族の利福増進のため  
死を賭してアジア・アフリカ低開発区域の最前線に赴かんとす  
わが愛する日本の青年諸君  
われに続かんとする者またはわが志をつがんとするもの果たして幾人ありや  
アジア・アフリカの民族は永年西欧諸国の圧政下に苦しみ  
今もお貧困のどん底に喘ぎつつあり  
古人はアジアは一つなりと喝破せり  
われはアジア・アフリカは一つなりと確信する  
われらはアジア民族の先達なり  
われら以外誰かあわれむべきアジア・アフリカ民族の将来を救わんと努力する者ありや  
われら今にして立たずんばアジア・アフリカ幾億民衆の行末をいかにせん  
わが愛する日本の青年諸君  
諸君の責任は重大であることを銘記せよ  
世界平和の実現と祖国の繁栄と  
アジア・アフリカの復興はすべて諸君の努力によってのみ達成しうことを忘るるなかれ  
諸君は進んでわれらの祖先がわれらに残したるこの美しき日本をまもり、この日本が世界平和の礎となるよう粉骨砕心せよ

現在、アジア、アフリカで最も欠乏しているものは技術で、ことに土木技術が最も必要視されているので、この際、わが国の新進土木技術者は進んで世界のため、アジア、アフリカのため、広く世界人類のために身をていしてアジア、アフリカの不毛の地に骨を埋める覚悟をもって行く決心をしてほしい、今こそ諸君が身命をもって国家のためにつくす最上の機会だと思う。

## 土木技術者の環境

### 名誉員 高橋三郎

私も「話のひろば」の記事を執筆することになったが、私には吹聴するような職歴もなく、また、参考になるような失敗話もなく、ただ平凡に年老い、まことにおぼろしいと思うわけであるが、しかし私にとっては、平凡であったことがむしろ幸いであったと考え、また土木技術者になったことが良いことであったと考えている。

目下世間は大変はなやかである。精密機械とか電子工学とか化学とかの方面の技術者がもてはやされていて、土木技術者になったことを後悔している人が中にはあるかもしれないから、これらの人々にあるいは参考になるかと思ひ、いささか述べてみようと思う。近頃は人づくりとか英才教育とかいう言葉が流行して、秀才や天才の部に属する人に興味もたれているようだが、私のような凡才の言葉が案外多くの土木技術者の参考になるのではないかとも思われる。

私は当初、機械技術者になりたいと思って高等学校に入学した。これは私のかよった中学校の付近に工場が多かった関係で、その環境に支配されたようである。しかし大学に進むにあたって、いよいよ学科を定める段階になったとき、第1に病弱な身体でとても工場勤務に自信がないこと、第2に土木技術者が職業として一番安定していることを考えて土木の方を志願することに定めた。しかし、これは少々妙な考え方であったように思われる。第一病弱だから土木に行くというのもいささか逆のようでもあり、就職の面では、当時の大不景気に遭遇して、大学卒業の際、雇い先からの申込みはたった1人しかなく、私のごときは、先生

奔走でかろうじてお情けの就職ができたという始末だったからである。

だが実際には、卒業当時 45 キロの体重しかなかったものか、3年ほど現場を勤めたあと 60 キロに増加していて、当初の私の思惑は的中したことになった。職業の方でも2回ほど移ることはあったが、割合に長い生涯を安定に過ごした結果となっている。

この生涯をふり返って考えてみると、やはり健康であることと生活の安定ということが、人間に幸福をもたらす最大の要素であることが痛感される。私自身にとっても健康には起伏があったが、健康のときは本も読み、仕事も進み、また不思議と環境も良くなることを体験することができた。

近頃、現場に行ってみて、技術者が健康そうに、愉快に激務に従事しているのを見ると、まことにうらやましく見える。自然と取り組んで種々の立場で工事に参加し、その工事が追々と実を結んで行くことが楽しみとなるであろうと思うと、私も土木屋になったことが嬉しくなって、これらの人々がまことに崇高に私の目に写ってくるのである。

つぎに生活の安定について少し述べてみたい。昔、英国の小学校の読本に「ディーン川のほとりの水車小屋」という記事があった。これはある王様がいて、思うこと成らざる勢威をもってしたが、幸福感がない。そこで家来に国内中に幸福を探させたところ、結局、水車小屋のおやじが毎日楽しく鼻歌を歌いながら働いているところに幸福を見出だしたという話である。幸福というのは、高い地位に昇ったり、大金持ちになったりすることでもたらされるものではないということを風刺していることはいままでもない。このおやじの幸福感には、健康と生活の安定が要素になっていると考えられるのである。いまの苛烈な世の中では、生活

の安定ということもなかなかむずかしいことではあるが、この点から見て土木技術者は割合に恵まれている。いまの若い人達、つまり戦後職に身を投じ、世の中の不景気を全く体験したことのない人々にはピンとこないかもしれない。しかし景気のよいときは、はなやかな学科の職種など、不景気となるとみじめな様相を呈するのが常である。私の体験では、土木技術者は割合にこの浮き沈みが少ないと観察されたのである。

しかしながら、土木技術者といえども、必ずしも平静に安定成長しうるものではない。私の長い職歴を通じてみると、数回の危機が訪れた。これをふり返ってみると、いつも友人がすかさず、別に私が頼まなくとも、私を助けてくれたことになっている。しかもその折、私の成長が助長された形になって表われている。この事実から考えてみると、まずわかることは、日頃友人を大切にしなければならぬということである。その友人は必ずしも不日助けてもらうつもりでマークした人ではないが、全く思いがけない友人に助けられたことになっている。

私もこれまで、かなり多くの他人の就職の世話をしてきたが、この場合、はめ込み先がなく困らせる人は概して日頃努力していない人である。日頃毎日毎日の仕事に努力している人は、大概前職場でも評判が良く、また仕事にも実績をあげているから、仲人口をいいやすく、容易に採用してもらえる。なお、そのような人を世の中は野球の選手をスカウトするように求めている。したがって「食いはぐれ」はないものと保証して良いと思う。サラリーマンは毎日勤務時間を勤め上げれば月給がもらえるから、安閑として日を送りやすい。また努力をしても、それがたちまち認められて昇給するようなことがないから、努力をすることも馬鹿馬鹿しくなりがちである。いわ

んや自分の仕事に興味を持ち得ぬときは、このような気持になるであろう。これは当人にとってはなほ不幸なことである。しかし、私は土木の職場には、このような職種はないものとする。もし、これがあつれば、この人は職種に興味を持ち得ないからである。現にそういう人で転々として職を移る人があるが、はたしてその人にあつような希望を達し得るかどうかはすこぶる疑わしい。努力をすれば自然に職場に興味を持つようになるし、また自然に努力の意欲もわいてくるに違いない。世の中に秀才あるいは天才といわれ、栄進している人があるが、この人達をよく調べてみると、必ず日頃の努力がともなっていることを認めることができる。むしろ秀才や天才は努力によって生まれてくるものと私は思っている。

「青年よ、すべからく大志を抱け」というクラーク博士の言葉にくらべて、私の言葉はすこぶる消極的であるとの批難があるかもしれないが、世の中を愉快に、安定した成長を続けつつ送ろうとすることこそ、大志ではなからうか。

土木技術は地球加工技術ともいふべく、複雑な地形地質や気象などにも考慮をはらわれ、しかも経済性に最も重点的に工事が設計され、施工される。近頃はマスコミの時代で大きな工事がもてはやされるが、技術者から見て細部の点で抜けていたり、ことに経済性に欠けていたならば三文の価値もない。各種の技術が



高橋名普員

細胞となって、これが総合されて工事ができ上がって行く。そして各細胞がおのおの重要であって、ことごとくそれに創意と工夫が要請される。たとえば長大トンネルが掘削されるとしても、測量が悪くて両端より掘進して中央でくい違いがあってはどうにもならない。すなわち工事場のいかなる局面において参加する人も、その創意工夫が生きて行き、毎日の努力が要請される。これがおおむね土木事業の特徴といえるであろう。

昨今の日本では、高度成長が盛んに論議され、資金をいくらつぎ込んでみてもだめということから、man powerの開発とか英才教育とかがいわれている。この内容とするところは、国民教育の向上、技術教育の改善、技術者数の増加、有能な人の利用方法などが考えられると思われる。また、日本の技術が外国の模倣を抜けきれないから、天才の発見とか、その育成とか、また、それに対応して教育の改善とか、試験制度とかが考慮の対象にのぼっているようである。いずれも結構なことには相違ないが、教育とか試験制度に重点を置かれることに対しては、いささか警戒的である。何よりも大切なことは、技術者がその職責を楽しんで安定成長をとげるような環境を作ることが大切なことであろうと思う。エジソンのような人は教育によって育成するというわけにもりかないし、試験制度でこれを発見することもできない。

人間にはそれぞれ特色があって、大体小児のときからそれが表われる。学校教育の過程においても、数学に長ずるとか、美術に長ずるとかの長が表われてくる。これもかなり環境に支配されて表われてくると考えられるが天与のものもある。これらを引き出して数学者に仕立て上げたり、美術家に仕立て上げたりすると話は簡単であるが、これ

をかりに橋梁の設計技術者に仕立て上げた場合は、天与の才能は没却されるのではなく、橋梁設計にこれら天与の才能が生かされ、成長するのである。このことは学校教育にも凡庸な先生の試験にもphaseが合っていない。かえって、これはその天与の才能を殺すのではないかとさえ憂慮されるのである。環境がその成長に資するのほかにないのである。

土木技術者は概して千変万化する自然にいでむのであるから、経験が大切な要素となる。したがって、長くひとつの職責につき、またそれに日常努力した人が貴重な存在となる。これも教育や試験の対象にはなかなかなりにくい。なお、また学校の学級増設を行なって技術者の数を多くすることも、技術の進歩からいって早急には効果を表すまい。私の経験では学級の増設は概して景気が煮つまったとき実施され、卒業生がでる折には猛烈な不景気が襲来してくる。こんどもそのわだちをふむのではないかと、ひそかに憂えているわけである。不景気はお互いいやなものである。その際には土木技術者といえども多くの人がふるい落とされるであろう。その際には指導者も十分善処を希望するとともに、土木技術者もせっかく努力精勵して、私の保証するように安定した成長をとげられるべきことを念願する。

## 土木工学科に学んで

北海道大学 福岡 捷二

「君どこの科を専攻するつもり」「土木さ」「どうして土木に行くつもりになったの」これは僕が学部移行の際にもらした友だちとの対話の一部である。

「そうだね、まず自然を相手とした

大きな仕事であるから、何か大きなものをとあこがれている僕の気持と一致するところが多いんだ。特に日本のような小さい国にあっては、国土の総合開発ということが非常に重要な意義をもっており、それに実際に着手しうるのは土木技術者であること、もちろん国土開発は単に自分一人の力でできる仕事ではなく国民全体の力が結集されて始めて実現されるのであって、その結果はとりもなおさずわれわれの生活に潤いを与えるということに密接な関係があるんだよ。僕はその中で国土開発のパイオニア的役割をはたしたいわけさ。何といっても自分たちの努力した仕事の結晶が、これからずっとあとまで記録されるなんて魅力だよ。

それにどのようなものにもいえるかもしれないけれど、特に公共事業には国民の眼がきびしく光っているから、全くやりなおしがきかないという土木事業のありかたにも共鳴するところが多いんだ。とかく工学というセクショナルリズム的な傾向に陥りがちで、他の理学・農学などとのつながりが非常に薄いように思えるんだ。それじゃあまり進歩も望めないし、例え進歩してもかたわな進歩しか望めない。その点、土木という分野は違っている。このことが僕を土木にひきつけた要因の一つさ」「一体それはどういうことなの」

「そうだね、あまり自信をもってはいえないけど、ただこれだけは断言できる。日本の長い歴史を振りかえってみると産業は農業が主流を占めてきたことは明らかな事実だろう。したがって、水がわれわれの生活に重要な意味をもってきたわけさ。ということは古くから治水、かんがいということが重要であったんだね。これは土木じゃないか」

「しかし、そのことと土木がセクショナルリズム的でないということとどういう関係があるんだい」

「この農業から、やがて種々の産業

が派生していったんだ。したがって、あらゆる工学の母体は“土木”にあると僕は解釈しているんだ。したがって土木だけにとどまらず多方面に渡る広い視野がどうしても必要なんだ。このことが僕に土木がセクト的でないといわしめるゆえんなんだ」

「そうだね、実際に僕たちの生活と表裏一体な国土建設という大事業を推進する人は広い視野と洞察力がないと本当に安心してまかせられないものね」

「その通りさ、一つ一つの事業がわれわれの生活向上に直結しているということはやりがいがあるし、責任を感じてしまうよ」、これは僕が土木科へ入った当初の気持であり、今日の気持でもあるわけです。まがりなりにも少しずつ土木の知識を吸収し、史実をみるにつれて先人のつみ上げてきた偉大な功績の上にあぐらをかくことなく、われわれ明日の技術者は社会というわくの中で、広い視野の上に大きくはばたこうと努力を重ねております。

## 日本大学理工学部

### 山崎 泰

爪先に突きあたって石コロは、一つの自然の中に存する。また、これが自然の一翼であると感ずる人は、はたしてどれほどでしょうか。それほどに自然の力のいかに大きいかを感じさせられます。われわれ土木工学を学ぶ者、この力にどれほどの情熱と疑惑と闘争心を持たされることか、この道に入ってから常に感じさせられるのですが、土木技術を選んだ理由たるも、この自然環境を利用し、産業計画ならびに社会の要求にもとづく環境造成を、人間の有する全知全能全身とてぶつかり、すばらしい技術と規模で造り出される巨大な建設物の力強さ、壮大さ、しか

も自分にもこれを monument として残し得る感慨に浴することができると思えば大変な生きがいを感じると思っていました。しかし、家系における土木技術者の多い中で、土木技術者の道に入ったことは「蛙の子は蛙」的考えに終るかもしれませんが、その蛙の子にも他に考えさせられることがあり、それなりの理由も持たされたわけです。それらの問題を大別するに、経済性と美観、土木技術者の生活管理でした。私は初めから土木技術者になろうとは思っていませんでした。しかし、技術者になることは、決めてあったのです。だが、どうせなるのであるならば、多少の内情のわかる土木に入って、前述の事がらで自分なりの考え方で研究し、改良の余地を見い出してみたいからであります。経済競争というよりも、経済競争に等しい今日、昔からの土木屋の感覚での経済観で、いつまでも続けることは、他産業の基礎的存在にある建設界が一步、二歩とおくれることは、時間というものその差を大きくしてしまうということでした。第二の美観ですが、一般の公共建造物に対する美観の不認識もさることながら、土木技術者一人、一人のそれに対する欠如、ということです。今日、美観の云々を語られてきたので、以前ほどでもありませんが、せっかくの自然の potential energy をわれわれの社会に取り入れるにしても、その調和を考えず、むやみに力学的、経済的に押しつけてしまうことです。逆に、近い年に造られた隅田川にかかる多くの橋を、あれほどに変えていることは、すばらしいことと感じています。第三の生活管理ですが、危険性の高いうちの安全度の低さ、肉体的、精神的管理と不規則に陥りやすいことでした。以上のように取りたて土木の何々が好きだから……といったことがなく、いやで仕方のなかった点が目に

つき、たまりかねて飛び込んだようです。そのうえ、ただ、もし自分で事業を成すとするならば、土木事業は、自分に適していたと感じたことも確かでした。これらとてつもない望みを持っておりましたが、少年時代の観る社会通念は書くにおよばぬことでしょうか、専門の道に入り、いろいろと見聞するにつけ、これらの研究の重要性を痛感し、もってこれからの抱負ともして行きたいと思っています。

## 名古屋工業大学

### 井沢 滉

なぜ、土木工学を選んだか、と問われることがしばしばある。そんなとき、ただ漠然と好きだからとだけしか答えないことが多い。いま苦しかった受験当時を思い出して、土木工学への希望と夢とを回想してみよう。

まず、土木の仕事は、他にくらべて断然規模が大きく、男性的である。大ダム工事、東海道新幹線工事などのニュースがいつその興味をあおってくれた。土木工事は多くが公共的で、そのほとんどが大空の下での仕事であるため、直接自身で見る機会が多い。こんな仕事を計画し、設計し、施工できたらどんなにか愉快であろう。さらに日本の土木技術は欧米とくらべて、勝るとも劣らぬものらしい。土木技術者になれば将来外国に行けるかも知れない、という点も大きな魅力であった。

夢とは別に現実的な理由もあった。第一は入試関係である。ほかに希望する学科も確かにあった。大学の地理的条件、入試の難易は受験生には直接的の問題である。その点土木工学は工学の中では、比較の入試の楽な学科であった。こんなことはあまり明らかにしたくないが、大多数の受験生が直面する事がらで

あろう。第二は就職の点である。工学部ならば当時どの学科でも就職については、問題はないと考えられたが、遠い将来の経済状態の変化などを考えた場合、土木事業はいつの時代にも比較的安定しているらしい。また就職後も割合に優遇されるらしいという点も大きなファクターであった。

以上が土木工学を選んだおもな理由であるが、その当時、土木に関しては具体的にはほとんど何も知識がなかったといってもよい。土木工学とはどんなものかが少しわかりかけた今日、土木がますます好きになった。夢の多くは、はかなく消えるものであるが、土木工学に対する自分の夢は正夢であったことを感謝している。人口の多い、このせまい国土の日本を、また大きくは世界をより住みやすくするのが、土木技術者の大きな責務である。現在では土木工学の持つ意義の偉大さを知るとともに、土木技術者の卵であることに大きな誇りと重い責任を感じているしだいであります。

## 岐阜大学 小池 健夫

「何故に土木工学を選んだか？」良く聞かれることである。正直のところこれといった理由を持たず、ただ漠然と選んだにすぎない。しいていえば、ほかに進む道がなかったと答えるほかはない。普通科の高校に入学し、人並みに大学進学を志したものの願書を提出する段になって迷った。自分を良く検討してみると先生とか普通の会社員のような細々とし

た事務的なものは大嫌い、それかといって特別に文学的、芸術的センスも持ちあわせていない。経済のような抽象的でしかも対人関係を重視する仕事は向かない。要するに文科系には自分として進む道はなかった。就職の面から考えても工学部よりほかにはないと思った。しかし、工学部といっても機械にはさほど興味を持たないし、電気はきらい、化学系統はきらいではなかったが、一生の仕事としては不安があった。残るは建築か、土木。ここで自分の実力を考慮して得られた結論が土木工学であった。そう決めてからは、自分は土木以外に進む道はないと考え、入試は土木一本で押し通した。両親も自分の選んだ道に反対しなかった。しかし、大学入学後、誰もが陥いる疑問に遭遇した。はたして自分は土木屋にむいているか、いろいろ悩み、考えた。小さな田舎のガラの悪い土建屋しか知らなかった自分は不安になってきた。そこで、もう一度考えた。室内での精神的仕事より戸外での肉体的仕事の好きな自分。細ぼそとした仕事、抽象的な仕事の嫌な自分。やっぱり土木屋むきだと不安ながらもそう思うようになった。専門の講義も具体的なものになるにつれて面白くなったが、何よりも意を強くし自信を持たせてくれたのは夏の実習だった。炎天下の重労働だったが、大した苦痛もなく、毎日毎日作業着姿で、あれこれと実習をやっているうちに、土木屋の良し悪しが自分ながらにわかってきた。現場勤めは健全な精神と肉体を必要とし、好きでないと勤まらぬこと、山奥の現場の苦勞、理論と現場の差異、人間関係など苦しいこともある

が、自分にとっては大した問題ではない。今までの不安は一掃され新たな自信を持ちえたことは、実習の大きな収穫だった。

土木屋ははなやかな文明社会の蔭にかくれた地味な存在である。しかし、土木屋なくして現代の繁栄はなかったわけである。社会的に不可欠な意義ある職業である。無から有を造り出す喜び。自然を改造し、人類に役立てる喜び。自分の手がけた仕事が具体的な目に見える形を残し、しかもそれが半永久的なものであること。男らしく、たくましい仕事。これこそ土木屋の大きな喜びであり、自分が土木屋であると広言できる自信と誇りの根源を成すものである。自分はいま、土木屋の卵となったことに悔いはなく、自分の最適の場と考えている。いまでは旧友や恩師が口をそろえて、自分が土木に進んだことは自分にピッタリだといってくれる。そういうときはいつも自分もそう思うとはっきり誇りを持っていることができる。

土木屋として、だれしも大きな夢を持つであろう。それに関連した就職も考えると思う。官庁か請負会社か、どちらにも一長一短はあるが、いままでの自分の見聞や経験からして自分は請負会社で働きたい。しかも現場で、現場のあの活気ある雰囲気は実にすてきだ。自分は平凡な一土木技師で良い、地味な縁の下の力持ちで良い、コツコツと真面目にやりたい。大きな望みといえば将来できることなら後進国の開発のため、外国にも行きたいものである。

以上が私の土木を選んだ理由と現在の心境、それにきさやかな抱負である。

2月号より3回にわたって登載した、名譽員の方々と若い学生員の執筆による「懐旧談」「土木工学科に学んで」は一応本号をもって終了。本文執筆にあられた各位に対し厚くお礼申し上げますとともに、会員各位のパラエティーに富んだ「話のひろば」欄への投稿をお待ちしております。

【編集部】